

イラク戦争と「埋め込み」報道

——マスメディアの新しい役割——

大 石 悠 二

緒 言

2003年3月に勃発したイラク戦争は、すでに現代史の一部になりつつある。米政府とマスメディアに煽られた戦時中の興奮が冷めるにつれ、読者と視聴者の関心は急速に薄れてしまった。2005年10月15日、暫定政権下のイラクでは新憲法草案に対する国民投票が施行され、曲がりなりにも米国主導の新国家体制が出来上がった。しかし、反米抵抗勢力による爆弾テロが相変わらず続発して、混乱は一向に収まりそうにもない。

時計の針を近過去に戻してみよう。2003年5月1日、アメリカ合衆国のジョージ・W・ブッシュ大統領は、行政権の総覧者の立場ではなく世界最強の軍隊（陸、海、空、海兵の四軍）の総司令官として、搭乗員服に身を固めて航空母艦エイブラハム・リンカーンの飛行甲板に降り立った。大きな横断幕が司令塔に張り出され、そこには「任務完了（MISSION ACCOMPLISHED）」と大書してあった。この演出過剰の晴れがましい舞台の上で、マスメディアの取材を受けながら、ブッシュは大規模戦闘の終結を高らかに告げた。

実際、米軍は3月20日の開戦から僅か3週間で、中東屈指の産油国の首都バグダードを攻略し、サダム・フセイン政権を瓦解に追い込んだ。しかし、ブッシュが先制攻撃の口実とし、米英両国の主流マスメディアが唱和した大量破壊兵器（WMD＝核・生物・化学兵器）は、米軍の懸命の搜索にもかかわらず、ついぞ見つからなかった。

この戦争は古くて新しい問題、即ち報道機関と政府との関係を改めて浮き彫りにした。マスメディアの大多数は愛国的熱狂に取り付かれ、報道機関としての客観性を欠き、読者や視聴者に公正な情報提供という基本的使命を達成しなかった。米国の時事週刊誌『タイム』はブッシュの勝利宣言から半年後の2003年10月6日号で、表紙に「任務未完了（MISSION NOT ACCOMPLISHED）」と大きく刷り込み、見込み外れに終わった戦争の実情をカヴァーストーリーに仕立て上げて掲載した。米軍だけではなく、マスメディアも同様に、本来の任務を完了しなかったという批判は免れない。

報道の観点からイラク戦争を回顧すると、そこには画期的な出来事があった。従軍記者は兵士と肩を並べて戦闘に直接参加し、軍当局の検閲を経ることなく、戦場の光景をそのまま

本国に伝えることが可能となった。これが「埋め込み」報道である。

イラク戦争とメディアの関係について、日本人研究者による業績が既にいくつも公刊されている（柴山：2003年、門奈：2004年、石澤：2005年、木下：2005年）が、本稿は「埋め込み」に主題を絞って論じてみたい。21世紀に入ってから、超大国アメリカはますます一極支配を強化しているが、その一方で将来も世界各地で国際軍事紛争が絶えることはあるまい。それに伴い、今後も報道の在り方、とりわけ埋め込み報道に関して、論議が尽きることはないだろう。

I

戦雲急を告げる2003年2月3日、米国防総省は来るべき対イラク武力衝突に備えて取材の手引を公表した。この長文の文書はすべて大文字で書かれ、役所風の文体で極めて読みにくい代物である。その最大の眼目は、報道者（記者、カメラマン、キャスター）に最前線の戦闘部隊に従軍を認め、戦場からの直接報道（印刷媒体の送稿、電波媒体の音声と映像の中継放送）を許し、さまざまな制限はあるものの、建前としては軍事検閲を廃止したことである。

次の諸項目は「米軍中央司令部の責任領域内に於いて、有り得べき将来の作戦／展開中の埋め込みメディアに関する広報の手引き（PUBLIC AFFAIRS GUIDANCE=PAG）」と題する文書（以下『埋め込み手引き』と略記）からの抜粋である。これは約50項目にのぼり、微に入り、細に入っているので、ここでは到底全体を紹介できない。そこで要点を拾い上げてみよう。

◆メディアは、航空、地上部隊の基地、かつ艦上で、部隊の兵員の中に埋め込まれ、作戦・戦闘任務に参加できる。

◆埋め込み報道者はメディアの代表として部隊と行動を共にし、その期間を数週間、あるいは数カ月延長できる。指揮官は宿舎、軍用食糧、必要なら医療を部隊の兵員と同様に供与する。また、必要ならばメディア制作物の送稿・発信を援助する。

◆同行取材中には、自前の車両を使用できない。

◆米軍の車両、航空機、艦船に便乗できる。

◆報道の任務を遂行するため、通信装備の使用は、格段の定めがない限り、禁止されない。しかし、部隊指揮官は作戦上の安全を理由に電子的通信の発信に一時的な制限を課す。

◆個人用火器の携帯を許可されない。

◆部隊の戦術的配置の細部、正確な位置、兵員の数の報道は制限される。

◆米軍死傷者の身元は、本国の近親者に告知されてから、明らかにできる。

「埋め込み」とは、英語のエンベッド (embed) の訳で、通常は受動態で用いられ、中に「嵌め込む」とか「埋める」の意味である。報道者は文字通り最前線の部隊に埋め込まれ、兵士と寝食を共にし、そして戦闘に際しては生死も共にする。

開戦前、米政府高官が「今度の戦争は史上最も取材される戦争となるだろう」と語った通り、国防総省は2700人に記者証を発行した。この新機軸の取材方式は、大きな危険を伴う。それにもかかわらず、多数の志望者が殺到した。だが、軍の受け入れ態勢から、全員の希望が叶ったわけではない。その人数は約600人に絞られた。

埋め込みの機会は、まず新聞・雑誌や放送局の報道機関に与えられ、個々人の報道者にはない。しかし、フリーランスの記者や写真家は、報道機関によって当該社の代表に選定される場合は、埋め込み従軍を認められた。配属先は米軍当局が決めるので、運に当たり外れがある。華々しい戦闘部隊ではなく、地味な補給部隊という場合もあった。

さらに米国防総省は埋め込み報道を自国に限定せず、海外の報道機関にも門戸を開放した。従軍を認められた外国の報道陣は、約150人にのぼった。

アラブ世界の衛星TV局アルジャジーラは、カタール首長国の首都ドーハに本社を置き、米国の主流電波メディアの傾向に追従せぬ独自の視点から報道したので、後に米国防長官のドナルド・ラムズフェルドから天敵視されるに至った。だが、米軍部は度量の大きいところを見せて、同社の申請を承認した（ただし、現場では冷遇した）。

戦争報道は交戦当事国の新聞・雑誌、テレビにとって絶好のビジネス・チャンスである。印刷媒体は販売部数の増加、電波媒体は視聴率の向上を期待できる。映像報道の時代、ケーブルTVにとっては、受信契約数の増加となっており、経営基盤を強化できる。ケーブルTVの視聴者は、開戦からバグダード陥落までの3週間で、300万から7400万に跳ね上がった。(Katovsky: 2003年, xviii 頁)

また、戦争は個々の報道者にとって、戦争は職業的使命感（たとえ功名心にせよ）に裏打ちされた冒険の機会である。とくにフリーランサーにとっては、名声と高収入を得る好機ともなる。またストリンガーから正社員に登用され、安定した勤務先を獲得する場合もあるだろう。

米国政府と軍部は確固たる根拠を欠いたまま、イラクの大量破壊兵器保有を喧伝した。それだけに従軍は相当の覚悟を必要とした。埋め込み報道者は細菌戦争に備えて予防注射を打ち、毒ガス防護の装備を支給された。朝日新聞記者の野嶋剛はクウェートの米軍前進基地で、防毒面、防護服、長靴を10分以内に装着する講習を受けた。(野嶋: 2003年, 24 頁)

埋め込み取材者は受け入れ先によって、かなり事情を異にした。空軍基地や海軍の艦船では、航空機の出撃、巡航ミサイルの発射を見守るだけで、イラク側の砲火による生命の危険はなかった。だが、地上部隊では、兵士と寝食を、いや生死を共にする。装甲兵員輸送車、特殊戦闘車の狭い車内で寄り添い、激しい震動と騒音に耐えねばならない。野営に際しては、

砂漠に塹壕を掘り、その中に身を潜ませた。

この取材方法では、四六時中、報道者は兵士たちに密着せざるを得ない。分隊規模の閉鎖集団の中で、苦楽を共にすれば、兵士の本音を聞け、同時に戦友意識も生まれよう。だが、ともすればジャーナリストとしての醒めた目、批判精神の喪失を招きかねない。

地上部隊がバグダード目指して前進と戦闘を繰り返す中で、イラク住民の声を聴く暇はない。常に米軍の立場から見聞するだけである。戦車の操縦兵が厚い前部装甲に開けられた小さな覗き窓から前方を見るしかないように、埋め込み報道は葦の髄から天井を覗くのと同様で、局地的戦闘の描写がいかに生々しくとも、報道としては視野狭窄の弊害を免れない。

II

4月にはバグダードの陥落、5月にはブッシュ大統領の勝利宣言、12月には逃亡中のフセインの身柄拘束一と、戦局は予想以上に速く進行した。ところが米占領軍に対するイラク側の武装抵抗、さらに対米協力者に対するテロリズム（しばしば一般人を無差別に巻き込んだ）は、やむことなく今日まで続いている。ブッシュが「任務完了」と見得を切ってから2年半を経過した執筆時点の現在（2005年10月）でも、イラク国内の混乱は一向に収まりそうもない。

米国はイラクの主権回復後も十数万の大軍を駐留させ続けているが、開戦時の国民的熱狂はとうに冷めて、報道陣のほとんどが引き揚げてしまった。記憶は風化しやすいものである。だが、イラク戦争にかかわった六十数人のジャーナリスト（少数の軍関係者を含む）の証言をまとめた書物が刊行され、埋め込み報道の実態を記録にとどめている。（William Katovsky and Timothy Carlson, *Embedded—The Media at War in Iraq, An Oral History*, Connecticut, 2003）。今日の視点から読み直しても、同書は興味深い。

#

『ボストン・グローブ』（*Boston Globe*）紙のスコット・ネルソン（Scott Bernard Nelson）は、もともと金融担当記者だったが、持ち前の冷静さを買われて、従軍記者に選ばれた。同紙では15人の記者が特派員に選抜されたが、その中で埋め込み報道者となったのは3人だけだった。彼が配属された海兵隊第十一連隊の第二大隊は、イラク共和国防衛隊と戦った。彼の乗り込んだハンヴィー戦闘車が待ち伏せ攻撃に遭遇した際、砲手はイラク狙撃兵の隠れ場所を見失った。この戦場経験の浅い特派員は、弾丸が飛んで来る方向の建物を指し示した。そこを目がけて砲手が撃ち返す。50口径砲の乱射を浴びて、狙撃拠点は粉砕された。

咄嗟の間のこととはいえ、この行動は正しかったのだろうか？ ネルソンは自問する。自分分は観察者の立場を厳格に守るべきだったか、ジャーナリストの一線を越えたのではあるま

いか。だが、あの時、相手はこちら目がけて撃っていたのだ—と。(Katovsky and Carison : 2003 年, 200 頁)

『アトランタ・ジャーナル-コンステイチューション』(*Atlanta Journal-Constitution*) 紙の軍事記者ロン・マルツ (Ron Martz) は、米陸軍第三機動歩兵師団に埋め込まれた。部隊は国道 8 号を進撃し、バグダード空港を目指した。彼の乗った装甲兵員輸送車がイラク側に攻撃され、二人の兵士が負傷した。衛生兵が応急手当てに忙殺されているのを手伝いながら、マルツが最初に思い浮かべたのは、ジャーナリストとしての客観性を失っているのではないかという自省の念ではなく、従軍前に戦場の救命措置の講習を受けておけば、もっと手助けできたのにということだった。別の機会に、彼はイラク人の負傷者の手当てをした。(同書 : 361 頁)

ケーブル TV の『フォックス・ニュース』(*Fox News*) は、愛国主義的報道姿勢で知られている。その特派員リック・リヴァンサール (Rick Levanthal) は八輪駆動の軽装甲車 (LAV) に乗り組んで、夜間の近接戦闘を体験した。米兵は暗視眼鏡をかけているので、暗闇でもイラク兵の姿を見ることがが、自分には見えなかった。後に米兵から聞いた話では、イラク兵には僅か 30 ヤードの距離まで迫った者もいた。

彼が戦闘の模様を生放送した際、故国では妹と義弟が車の中で銃声交じりの兄の声を聴いた。彼女は仰天して、いたたまれずにスイッチを切った。

『埋め込み手引き』は、報道者に武器の携帯を禁じている。周囲の全員 (米兵たち) が武装し、また相手がこちらを撃っているのに、自分は撃ち返せない状況に身を置いて、彼は無力感を味わいながら、自問自答する。武器を持てたらよいという思いが何度も自分の心をよぎった。しかし、ジャーナリストが武装しない理由を理解した。つまり、報道者が武器を携帯していると疑われれば、もし捕虜になった場合、敵はスパイと見なすに違いない。そして、報道者の全員が武装していると判断するかも知れない。そのような道を歩みたくない—と。(同書 : 189 頁)

以上の数例からも、戦争当事国から派遣されたほとんどの報道者は、職業倫理の最後の一線でどうにか踏みとどまった。あるいはそう努力し、また自分の行動を反省した。取材者はあくまでもジャーナリストであり、決して兵士たり得ないのである。

しかし、この本の編者カトヴスキーによれば、手榴弾をつかみ、銃を手にした者もいた。また、斥候の兵士よろしく双眼鏡で遠方のイラクの輸送車を発見し、すぐさま指揮官に通報した記者もいた。この車両は直ちに米軍の砲撃を受けて爆発・炎上した。

埋めこみ報道者が特権を得ていたのと対照的に、米軍の庇護を受けないジャーナリストた

ちがいた。彼らは独立系（ユニラテラル＝unilateral）と呼ばれ、ほとんどがフリーランサーであった。しかし、主流メディアに所属する記者もいた。埋め込み報道は便宜を図ってもらえるが、その一方で制約も大きい。自前の輸送手段を持ってないし、配属部隊より先行できない。本隊から離れて自由に取材できないので、バランスの取れた報道は不可能である。

米国防総省は埋め込みによって軍隊と報道陣の相互依存（バイラテラル＝bilateral）関係を創出しただけに、統制に従わない独立系取材者を厄介者視した。国防副次官補のブライアン・フィットマン（Bryan Whitman）は、ぶっきらぼうに言い放っている。独立系が戦場で死亡、負傷、捕虜、拘禁、行方不明となり、また安全規則に違反して戦闘区域から追放される原因をつくった。このような事例が埋め込み取材者にないとまで言わないが、米軍は戦場を管制下に置く義務を負っている。独立系ジャーナリストがうろろうしていれば、戦場で発見された民間人と同様に扱われよう—と。（同書：208頁）

同時多発テロの後、ブッシュ大統領は対テロリズム戦争宣言で、敵か味方か（You are either with us or you're against us.）と迫った。米軍部もイラク戦争で最高司令官の二分法を踏襲し、開戦後もバグダードに残留している報道陣（ほとんどが独立系）に退去を迫った。埋め込み報道者は味方であるが、独立系は敵という論理である。

米国の主流メディアに属する者は脅迫に屈して、バグダードから引き揚げたが、日欧報道機関の特派員やフリーランサーたちは取材拠点のパレスチナ・ホテルに籠城した。ここは以前から報道陣が利用する宿として知られている。バグダード陥落後、米軍の戦車は同ホテルを砲撃し、英国ロイター通信社、スペインのTV局のカメラマンが死亡した。

英国の高名なジャーナリストのフィリップ・ナイトリー（Philip Knightly）は戦争報道に関する労作（*First Casualty* 邦訳『戦争報道の内幕』）の著者として知られているが、*Tell Me Lies: Propaganda and Media Distortion in the Attack on Iraq*（『嘘を吐け—イラク攻撃の中の宣伝とメディア歪曲』）と刺激的な題を付けた書物に寄稿し、次のように記している。いわゆる独立系ジャーナリストは、客観的、かつ独自の道を歩もうと試みて、忌避されるだろう。敵側から報道する者は、撃たれることを覚悟せねばなるまい—と。（Miller：2004年，100頁）

戦争は決して血沸き、肉踊るものではない。遠方からの砲撃、高空からの爆撃では、兵士は流血と破壊の修羅場を見ないで済む。しかし近接戦闘は残酷な殺し合いである。米軍兵士の多くは十代の終わりから二十歳代の若者で、ただ敵のイラク人を憎み、そして殺すことのみ仕込まれていた。埋め込みの密着取材は、とかく士気高揚の勇ましい記事になりがちで、兵士の内心の葛藤まで描写できるだろうか。

米軍の高性能兵器はイラク側の反撃や抵抗を圧倒した。埋め込み取材者は数多くのイラク人の死（兵士、民兵、そして民間人を問わず）を目撃したが、流血と破壊の実相をどれだけ伝えたか。米英のマスメディアは原則としておぞましい死体の写真を印刷物に掲載したり、その画像を放映したりしない。たとえ死体を見せても、無惨な姿は白い布に包まれている。

本社の編集者や番組制作者の求めもあって、戦場からの直接報道は、読者や視聴者に心理的抵抗なく受け入れられるように、衛生無害化（sanitized）されたのである。戦争の真の姿、とりわけ民間人の被害を伝えるには、最前線の戦闘部隊ではなく、死傷者の収容された病院での埋め込み報道を必要とした。

埋め込み報道は、情報の送り手と発信者と受け手の間に、新しい関係を創り出した。報道者たちはパソコンと衛星電話を装備し、最先端の電子技術を駆使して、インターネットで戦場から本国に記事、音声、映像を即座に送り届けることができた。機器の限られた容量のため、駒落としの画像は不鮮明でぎくしゃくしていたが、それがかえって緊迫感を盛り上げた。まさに報道革命である。

その双方向性の特質を利用して、読者や視聴者の反応は電子メール戦地の報道者の手許に届いた。一方、このIT時代の飛び道具は悪用され、非愛国的と睨まれたジャーナリストに数千通の嫌がらせメールが送りつけられた。

兵士たちは埋め込み報道者を通じて、戦闘の合間に故国の留守家族に電話で話したり、電子メールを遣り取りしたりすることさえできた。朝日新聞の野嶋記者は、沖縄に駐留した経験のある下士官に頼まれて、米国本土在住の日本人妻にメールを送った。最愛の妻がそれを読んだ時には、不幸にも彼は野営地で友軍の車両に轢き殺されていた。（野嶋 106～112 頁）埋め込み報道ならではの戦地挿話である。

III

米国のマスメディアは立法、司法、行政の三権に並ぶ第四の権力と買いかぶられ、あるいは自負しながらも、実際は軍部に対して弱腰だった。憲法が表現の自由を認めているにもかかわらず、戦時の事前検閲は当然視されていたのである。戦争特派員は戦場から遠い後方に待機し、広報将校の戦況発表に基づいて、記事を書くしかなかった。しかも、苦心作は検閲で削られたばかりか、軍の通信網の迷路を通り抜けるうちに、本社に到着した時にはニューズ価値を失って、使い物にならぬこともしばしばだった。

一方、軍部はベトナム症候群ともいうべき精神的外傷からからなかなか立ち直れなかった。1960年代の初期からインドシナ半島の内戦に十数年にわたって介入して、最盛時には50万の地上部隊を投入し、さらに空から第二次世界大戦を上回る量の爆弾を投下しながら、どうしても民族解放勢力のゲリラ部隊と北ベトナム正規軍に勝てず、1975年、不名誉な撤退を余儀なくされた。敗因は何か。マスメディアのせいである。第一次世界大戦での帝政ドイツと同様に、戦場では勝っていたのに、後ろから背中を一突き（stab in the back）されて敗れた。野放図な報道が銃後の反戦運動を扇動し、終には政治を動かしたのだと。

ベトナム戦争の報道には、軍事検閲の制約がなかった。マスメディアと軍部との相克の

中で、空前の奇妙な例外であった。もともと 1960 年代の初期に米国が南ヴェトナムに軍事顧問を送り込んだのが、泥沼に踏み込む始まりだった。やがて政府軍と民族解放勢力との武力衝突は拡大し、北ヴェトナムと米国との宣戦布告なき戦争に発展する。

しかし、無力なクライアント国家は、夏の虫のように戦火に引き寄せられて来た外国の報道陣に、軍事検閲を課すことができない（国内のマスメディアは検閲を免れなかった）。米国の遠征軍は南ヴェトナム政府の要請で戦闘を肩代わりしている建前から、検閲という伝家の宝刀を勝手に抜けなかった。折から発展期の TV 放送は、凄惨な戦場の光景をそのまま米国の家庭に送り込んだ。伝統的な印刷メディアは戦争批判の筆陣を張り、最後に米政府の外交政策を転換させた。軍部は面目を失った。

筆者は 1972 年 10 月から翌年 2 月まで、東京発行の時事週刊誌の特派員としてサイゴン（現ホーチミン）に滞在し、1973 年 2 月 18 日の第一次停戦成立を現地で見届けた。その間、手書きの原稿と撮影済みの写真フィルムは、米国連合通信社（AP）の現地支局に託して、航空貨物便で東京へ送った。入国前に南ヴェトナム政府から記者の身分を明らかにした入国査証を、入国後は米援助軍司令部から記者証を交付され、取材活動を制約されたり、検閲を受けたりすることはなかった。各国の新聞社は、検閲なしで記事を本社にテレックス（至急の場合は、国際電話）で送稿した。報道の自由の見地から、まさにヴェトナムは天国であった。

米軍部はヴェトナムの苦い体験を通じて、貴重な教訓を学んだ。第一に報道陣を戦場にみだりに近づけないこと。第二に報道陣を管制下に置き、勝手気儘な取材を許さないこと。その代わりに、軍作成の報道素材を提供する。1991 年の湾岸戦争は、うるさいメディアを黙らせ、世論を誘導・操作する好機となった。この戦争で米軍部は個々の取材を認めず、マスメディアをいくつかのグループに分けて、数人を選んで代表取材させた。これがプール取材である。

この制度はジャーナリストの特性ともいべき抜け駆けを許さず、自由な報道競争の足枷となった。プール取材を取り仕切る報道係将校は、インタビューに立ち会って兵士の口を封じ、原稿の点検（つまり検閲）に時間をかけて、ニュース価値を無くした。米国の政治学者のデイヴィッド・L・パレット（David L. Paletz）は、このような軍部の遣り口に対して、アメリカの公衆から戦争に関する詳しい知識と理解を奪うものとして非難した。（Lance and Paletz : 1994, 282 頁）

湾岸戦争では、もはや戦場の生々しい画像が放映されることはなかった。TV 報道はもっぱら空爆の戦果を誇示し、精密爆撃の模様をビデオゲームのように伝えた。画面中央に十字形の標準が定まると、次の瞬間に車両や建物はミサイルや爆弾の命中で吹き飛ばされる。まさに任天堂のソフトを使ったゲームのようで、出番のない報道陣はニンテンドー・ウォーと自嘲気味だった。

米軍提供の画像は目標に百発百中の印象を視聴者に与えたが、その命中率は過大評価され

ていた事実が、戦後に明らかにされた。実際の命中率は、25 パーセント程度に過ぎなかった。そして、攻撃の巻き添えを食った無辜の非戦闘員や非軍事目標の被害は、全く隠蔽された。こうして戦争の悲惨な実相は、イラク戦争と同様に（いや先駆けて）、巧みに衛生無害化されたのである。

対外戦争は国民の愛国心を高揚させる絶好の機会である。2001 年 9 月 11 日、首都ワシントン近郊のヴァージニア州アーリントンにある国防総省（ペンタゴン）とニューヨーク市にそびえる 2 棟の高層ビルを標的に、同時多発テロが勃発した後、両者は長年の反目に終止符を打った。ブッシュ大統領が呼号した対テロ戦争に、主流マスメディアは異をさしはさむことなく同調した。米国はオサマ・ビンラディンの率いる武装勢力アルカイダを匿ったアフガニスタンに聖戦を起こし、イスラーム原理主義者のタリバン政権を短時日で壊滅させた。この戦争は、空爆作戦が主体で、地上の埋め込み報道は行われなかった。

2003 年のイラク戦争は、1991 年の湾岸戦争の延長上にあり、舞台上の役者も似通っていた。大統領・総司令官の地位は（8 年間のクリントン時代を挟んで）父から子へ世襲され、国防長官の要職には父に仕えたラムズフェルドが子に登用された。統合参謀会議議長のコリン・パウエルは、国務長官となって軍事から外交の総責任者へ栄進した。実際、イラク戦争は第二次湾岸戦争に他ならず、第一次で果たせなかったイラクの体制打倒（regime change）を実現した。米国は民主主義を武力で輸出し、フセイン独裁政権を転覆させたのである。

この戦争の副産物は、新機軸の埋め込み報道で、口うるさいマスコミを手なずけたことである。湾岸戦争後、米国の主流マスメディアは国防総省の報道規制に不満を抱き、戦時取材の自由化を要望していた。同時多発テロ後、米国新聞編集者協会はラムズフェルド国防長官に埋め込み報道の実現を要求したが、タリバン政権打倒のアフガニスタン戦争には間に合わなかった。（柴山：2003 年、30 頁）そして、イラク戦争を奇貨として、『埋め込み手引き』が自賛する通り、軍部は「戦闘中の米軍部隊の最大限・徹底取材を促進」（TO FACILITATE MAXIMUM, IN-DEPTH COVERAGE OF U.S. FORCES IN COMBAT）することになったのである。

対外戦争は形を変えた国際政治・外交であり、軍事的勝利がすべてに優先する。専制政体の国家では、マスメディアは権力者の下僕に過ぎず、従って報道者の地位は低い。戦場では邪魔者扱いされる。民主主義を国是とし、文民統制が確立している国家でも、得てして軍部は威張りがちで、とかく軍事関連の情報を秘密として隠したがるものである。

過去の戦争で特派員は、実は厄介者だった。佐官待遇だから、無下な扱いもしかねた。危険な最前線に出ることは稀で、戦場の周辺にとどまっていた。第二次世界大戦中、アイゼンハワーやモンゴメリーなど連合国側の著名な将星は、後方の司令部でお気に入りの記者たちに囲まれていた。彼らは「名誉参謀将校」とおだてられたが、庇護者の片言隻語を大見出しになりそうな記事に仕立てて、その名声を高めるのに利用された。

正直なところ、マスメディアに期待される役割は、盲目的愛国主義（jingoism）の尖兵になることであった。とりわけ自国の戦争は、必然的に取材者の忠誠を要求する。特派員は愛国の熱情に燃えなければならない。ヴェトナム戦争は、この点に大きな疑問符をつけた。軍部の立場から見れば、検閲なき野放し報道は、利敵行為に他ならない。

2001年の同時多発テロは、マスメディア対軍部の対立関係を改善した。ブッシュの強硬路線は、愛国主義的国民感情の大波に乗り、主流派メディアの支持を得た。そして、アフガニスタンの次は、イラクの番であった。しかし、両国を同一視するには、難があった。前者は超保守主義の神権国家で、不倶戴天の敵アルカイダを匿った。後者は同じイスラーム教を信奉しても政教分離の世俗国家で、湾岸戦争の前科はあっても、ビンラディンを支援していた訳ではない。そこで開戦理由として、大量破壊兵器隠匿の疑惑がでっち上げられた。

イラクは過去に毒ガスを製造し、対イラン戦争で実際に使用した。この悪魔の兵器は、国内の反フセイン蜂起に対しても用いられた。核兵器の開発研究も行われたが、製造・実験までには至らなかった。湾岸戦争の敗北後、イラクは国際連合によって経済制裁を課せられ、国力がすっかり疲弊し、もはや大量破壊兵器どころではなかった。この疑惑を明らかにするため、国際査察が行われた（一時中断、後に復活）。だが、疑惑を裏付ける明確な証拠は、発見できなかった。

ところが、米国のブッシュ政権は（それに追従した英国のブレア政権も）、前回の湾岸戦争とは異なり、イラク攻撃に国際社会の了解を取り付けられなかった。国連安全保障理事会は戦争か平和かの鍵を握っているが、五つの常任理事国の中でも仏露中の三国は慎重な構えで、米英両国の短兵急な武力行使提案に同調しなかった。

米英の主流メディアは、政府の情報を吟味することなく垂れ流し、主戦論の形成に一役買った。第四階級は行政権を脅かすどころか、うまうまと取り込まれ、巧みに操られてしまった。大物コラムニスト、大記者、論説記者、それに学者やシンクタンクの研究員が、新聞雑誌に寄稿し、放送番組に出演した。彼らは最前線ではなく安全な銃後で政府と軍部に迎合し、読者・視聴者を誤りに導いたのである。

スウェーデンのハンス・ブリックス（Hans Blix）元外相は、1981年から1997年まで、国際原子力機関の事務総長、2000年から2003年まで国連監視検証査察委員会の議長を務め、イラクの大量破壊兵器の疑惑解明に携わった。彼は回顧録 *Disarming Iraq: The Search for Weapons of Mass Destruction* の中で明確に述べている。全世界に向かって確実と喧伝され、戦争を正当化する第一の理由となった禁止兵器の存在は、確認されなかった。このような武器はどこにも全く発見されなかった一と。彼は率直な、しかし冷静な筆致で、米英両国の主流メディアの名前を具体的に挙げながら、誤報の実例を示した。

ブリックスが辛辣に述べているように、判断の誤りに共通する要素は、「批判的思考の欠如」（Blix：2004年、263頁）だった。彼の率いる組織は、事実の検証に裁判や科学実験と同

じ手法を用いて、大量破壊兵器の存在しないことを結論づけた。ところが米英の主流マスメディアは体制に埋め込まれて、政府・軍部・諜報機関の予断と偏見に同調したのである。

2005年9月、ブリックスは来日して東京で講演し、筆者も傾聴した。彼は改めて米英両国が開戦理由とした証拠は誤り (faulty) だったと明言し、国際原子力機関と国連監視検証査察委員会の報告書が両国に無視された事実を指摘している。また彼は「独立専門職としての国際査察要員」(independent professional international inspectors) と米英両国の諜報機関要員とを比較し、前者が後者の近寄れぬ軍事基地や施設内に法的立ち入り権を保有していただけに、後者には入手できない情報をもたらしたと述べている。

米英両国の判断の誤りが誰の目にも明らかになってから、『ワシントンポスト』と『ニューヨークタイムズ』の両紙は、なぜ大失態を犯したのか、自己批判の検証記事を掲載した(2004年9月17日付の『朝日新聞』)。だが、何を今さらと、十日の菊の感を否めない。

結 語

湾岸戦争の後、ブッシュ(父)は豪語した。アメリカは新世界秩序を創り出し、唯一の超大国になった一と。ホワイトハウスの主が父から子へ代替わりして以来、この台詞は一層の真実味を帯びている。ワシントンは好ましからざる体制の国家に対して革命ならぬ民主主義を輸出し、時機を選んで予防戦争を仕掛けて、武力で政権を転覆するのに躊躇しない。いわゆる無頼漢国家 (rogue states) は、現在なお全世界にいくつも存在する。今後も米軍は海外出兵し、それに埋め込み報道者が同行するだろう。

埋め込み報道は、その得失を総合的に評価せねばなるまい。ジャーナリズムの軍事化は、もってのほかである。だが、巨大な戦争機械が動き出した後、報道陣による監視の目が必要となる。米兵が検問所でイラクの民間車輛を無警告で射撃し、婦女子を殺害した。この事件を報道したのは、埋め込み報道者であった。彼の記事と勇気ある証言がなければ、この悲劇は揉み消されたに違いない。過去の戦争では、民主主義国家の軍隊といえども、最末端の兵士は戦場の極限状況から略奪、暴行、虐殺、人権侵害に走ることは決して稀ではなかった。埋め込み記者の存在は、忌まわしい行為の抑止力となるだろう。

埋め込み報道には、まずジャーナリストとしての職業倫理の貫徹を必要とする。そして、最前線からだけでない情報を多面的に組み合わせてこそ、戦争報道は完成する。

もう10年以上も前、湾岸戦争の後でマーヴィン・カルブ (Marvin Kalb) は、ジャーナリストたる資質として、次の3点を挙げている。彼はCBSやNBCで30年間外交記者を務め、人気番組の「ミート・ザ・プレス」を手がけた後、ハーヴァード大学に転じた。彼はジャーナリズムの最も重要な機能として、①批判的に思考する能力②公平な態度③愛国主義の誘惑に対する自制力などの諸点を挙げている。(Lance and Paletz: 1994年, 4頁)。これらの指

イラク戦争と「埋め込み」報道

摘は、現在も、決して古くなっていない。

埋め込み報道時代の到来と共に、マスメディアは新しい役割を担うことになった。まずジャーナリズム本来の使命を再確認してこそ、次の戦争で「任務完了」を可能にするだろう。

【参考文献】（日本語、翻訳を含む）

- 石澤靖治『戦争とマスメディア——湾岸戦争における米ジャーナリズムの「敗北」をめぐる』（京都、ミネルヴァ書房、2005年）
- 木下和寛著『メディアは戦争にどうかかわってきたか——日露戦争から対テロ戦争まで』（東京、朝日新聞社、2005年）
- 金子勝、アンドリュー・デウィット『メディア危機』（東京、日本放送出版協会、2005年）
- 河津幸英『イラク戦争とアメリカ占領軍』（東京、アリアドネ企画、2005年）
- 近藤重克・梅本哲也『ブッシュ政権の国防政策』（東京、日本国際問題研究所、2002年）
- 柴山哲也『戦争報道とアメリカ』（東京、PHP研究所、2003年）
- ナイトリー、フィリップ著、芳地昌三訳『戦争報道の内幕——隠された真実』（東京、中央公論新社、2004年）
- 野嶋剛『イラク戦争従軍記』（東京、朝日新聞社、2003年）
- マイルズ、ヒュー著、河野純治訳『アルジャジーラ——報道の戦争』（東京、光文社、2005年）
- 門奈直樹著『現代の戦争報道』（東京、岩波書店、2004年）

【参考文献】（英語）

- Ahamed, Nafeez Mosaddeq, *Behind the War on Terror: Western Secret Strategy and the Struggle for Iraq*, Gabriola Island, Canada, New Society Publishers, 2003.
- Barber, Benjamin R., *Fear's Empire: War, Terrorism, and Democracy*, London, W. W. Norton & Company, 2003.
- Benette, W. Lance and Paletz, David L., *Taken by Storm: The Media, Public Opinion, and U. S. Foreign Policy in the Gulf War*, Chicago, The University of Chicago Press, 1994.
- Blix, Hans, *Disarming Iraq: The Search for Weapons of Mass Destruction*, London, Bloomsbury, 2004.
- Cooley, John, *Unholy Wars: Afghanistan, America and International Terrorism* (Third edition), London, Pluto Press, 2002.
- Halper, Stefan, and Clarke, Jonathan, *America Alone: The Neo-Conservatives and the Global Order*, Cambridge, Cambridge University Press, 2004.
- Katovsky, Bill, and Carlson, Timothy, *Embedded: The Media at War*, Guilford, The Lyons Press, 2003.
- Packer, George, *The Fight is for Democracy*, New York, Harper Collins Publishers, 2003.
- Mahajan, Rahul, *Full Spectrum Dominance: U.S. Power in Iraq and Beyond*, New York, Seven Stories Press, 2003.
- Miller, David, *Tell Me Lies: Propaganda and Media Distortion in the Attack on Iraq*, London, Pluto Press, 2004.

(本稿の執筆に際して財団法人放送文化基金から助成を得た。ここに謝意を表したい。)

筆者紹介 江戸川大学社会学部教授。東京経済大学コミュニケーション学部非常勤講師。同国際メディア・コミュニケーション研究所客員研究員。

